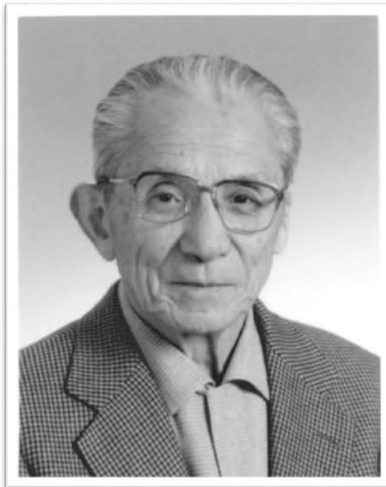


MEIHOH

追悼特集1 福村晃夫先生

追悼特集2 本多波雄先生



25

福村晃夫先生、本多波雄先生がご逝去されました。名報会では、追悼特集号の刊行を企画し、両先生にゆかりの深い方々に追悼文を御寄稿いただきました。

福村晃夫先生、本多波雄先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

目次

追悼特集 1 福村晃夫先生	1
福村晃夫先生を偲ぶ	稲垣 康善（特別会員） 3
福村晃夫先生を偲んで	西川 保幸， 國立 勉， 水野 徳重 （1974 年度修士） 5
人間味あふれる福村先生を偲んで	間瀬 健二（1980 年度修士） 8
福村先生を偲んで	松田 信之（1981 年度修士） 11
福村晃夫先生と中京大学で過ごした日々	長谷川 純一（1978 年度博士） 13
追悼特集 2 本多波雄先生	15
本多波雄先生を偲ぶ	稲垣 康善（特別会員） 17
本多先生の思い出	坂部 俊樹（特別会員） 20
本多波雄先生の思い出	平田 富夫（特別会員） 22
本多先生から頂いたもの	山下 雅史（1979 年度博士） 25
本多波雄先生を偲んで	宇野 洋二（1977 年度修士） 26

表紙

写真： 福村晃夫先生（左） 本多波雄先生（右）

追悼特集1 福村晃夫先生



福村晃夫先生 ご略歴

大正14年	1月	5日	福島県江田島生まれ
昭和20年	3月		旧制広島高等学校甲類卒業
昭和24年	3月		名古屋大学工学部電気学科卒業
昭和24年	8月		名古屋大学工学部 助手（電気学科）
昭和34年	4月		名古屋大学工学部 講師（電気学科）
昭和35年	4月		名古屋大学工学部 助教授（電気学科）
昭和41年	7月		工学博士の学位授与（東北大学）
昭和43年	4月		名古屋大学工学部 教授（電気工学第二学科）
昭和55年	2月		文部省学術審議会議専門委員（平成1.1まで）
昭和56年	4月		名古屋大学大型計算機センター センター長 （昭和63.3まで）
昭和61年	7月		文部省大学設置審議会専門委員（昭和62.9まで）
昭和62年	9月		文部省大学設置・学校法人審議会専門委員 （平成2.6まで）
昭和63年	3月		名古屋大学 停年退官，名誉教授
昭和63年	4月		学校法人梅村学園中京大学社会科学部 教授
昭和63年	7月		学術情報センター参与（平成17.3まで）
平成2年	4月		学校法人梅村学園中京大学情報科学部 学部長 （平成6.3まで）
平成6年	4月		学校法人梅村学園中京大学大学院情報科学研究科 研究科長（平成12.3まで）

平成 6年 4月 学校法人梅村学園 評議員 (平成 20.3 まで)
平成 12年 3月 学校法人梅村学園中京大学 退職, 名誉教授, その後,
学術顧問 (平成 20.3 まで)
平成 28年 12月 5日 逝去 (91歳)

その他

昭和 57年 5月 情報処理学会東海支部長・中部支部長 (昭和 38.5 まで)
昭和 59年 4月 情報処理学会理事 (昭和 61.4 まで)
昭和 59年 4月 文部省特定研究「多元知識情報の知的処理と統合化
に関する研究」 研究者代表者 (昭和 63.3 まで)
昭和 59年 5月 電子通信学会東海支部長 (昭和 60.4 まで)
昭和 61年 7月 人工知能学会会長 (初代) (昭和 63.6 まで)
平成 2年 3月 人工知能研究振興財団顧問 (平成 28.3 まで)
平成 8年 5月 情報処理学会名誉会員
平成 10年 5月 栢森情報科学振興財団選考委員長 (平成 28.12 まで)
平成 23年 4月 日本顔学会中部支部長 (平成 28.12 まで)

受賞

昭和 61年 6月 東海電気通信監理局長表彰
昭和 61年 6月 情報化推進貢献郵政大臣表彰
平成 6年 5月 情報処理学会功績賞
平成 8年 6月 人工知能学会功績賞
平成 9年 3月 大川出版賞「情報学絵とき読本」
平成 11年 6月 郵政大臣表彰 (中央表彰)
平成 16年 4月 瑞宝中綬章

福村晃夫先生を偲ぶ



名古屋大学名誉教授
稲垣 康善（特別会員）

福村晃夫先生は、去る 2016 年 12 月 5 日にご逝去されました。享年 92 歳でした。先生は、1925 年 1 月 5 日に広島県江田島のお生まれで、太平洋戦争終戦の年、1945 年 3 月旧制広島高等学校理科甲類を卒業され、名古屋大学工学部航空学科に入学されましたが、終戦による廃科で電気学科に移り、1949 年電気学科を卒業されました。名古屋大学工学部電気学科助手、講師、助教授を経て、1968 年に教授に昇任され電気第二学科第一講座を担当されました。そして、1973 年の大学院独立専攻情報工学専攻設置、1985 年の工学部情報工学科の設置に尽力され、情報工学科を育て、その発展に尽くされました。さらには、名古屋大学大型計算機センター、情報処理教育センターの設置にも尽力され、大型計算機センター長を務められました。このように 1988 年停年で退官されるまで名古屋大学の情報工学分野の教育研究発展のために多大な貢献をされました。さらには、名古屋大学定年退官の後も続いて、中京大学で、情報科学部、情報科学研究科、そして人工知能研究所の創設に尽力され情報工学の教育研究を推進されました。

先生は、以上のように長年にわたって情報工学の教育・研究に務められ、深い学識と先見性のある指導力に加え、真摯なそして人を惹きつけて止まないお人柄で、学部学生、大学院学生、若手研究者の教育と研究指導に当られ、ある時は人生相談にも乗られ、多くの有為の人材を育てられました。今では先生の薫陶を受けた優秀な後継者がさらに多くの俊秀を生み出しており、これらの若い俊秀が、今日、学界あるいは産業界の第一線で活躍しています。また、先生のお人柄に惹かれ、先生を慕う門下生は多く、つい此間まで「先生を囲む会」と言っても先生との味わい深いお話を聴き、先生と杯を共にできることを楽しみにしていましたが、今となっては寂しい限りです。

先生は、生涯を通して先生独自の深い思索を添わせた研究を精力的に続けられました。2012 年の情報処理学会第 74 回全国大会の招待講演「私の詩と真実」で、先生は「質と量」と題して語られました。その概要には、「大学は航空学科に入ったが終戦による学科の廃科、電気系へ転向、そこで人間を見つけた有線工学、そこで選んだ研究テーマ“通話品質”、ここから工学での“質”に対する闘いが始まった。記録されたものでなく喉から湧き出る音声を分析する。これは解剖と同質であり生臭い。だが生きた情報であれば当たり前のことである。消えるべき音は記録（空間化）されると洪水となり、処理は泥臭くなる。質とは聞こえ、見え、印象など心に刻み込まれるものであり、本来的に言語化を嫌うが、その言語の中に工学はいて、量を扱う。質が量に単調にかかわる例は稀である。質を言語化して量の重みを付けるにはその環境を添えなければならない。環境は

人の住まう場所であり土臭い。生臭く泥臭い情報を処理するには土臭さ（身体性）が要るのである。」とあります。先生は、情報学研究へのこの思いを、大川出版賞受賞の「情報学 絵とき読本」でも残すところなく語っておられます。

先生は、通話品質に端を発する音声情報処理研究から音声パターン認識の研究に発展させ、そこで進めた認識パラメータの選択問題、バイズ決定規則の評価問題に関する基礎的研究は、当時、揺籃期にあったパターン認識研究において高く評価されました。さらに、先生は、文字認識、画像処理に関する広大な研究分野へと発展させられ、また計算機のハードウェア、ソフトウェアなど多岐にわたる研究を展開されて、多くの先導的研究成果を挙げられました。さらには、それらを集約する形で人工知能、知識情報処理の研究を精力的に推進されました。

これらの研究業績を背景に、我が国の人工知能など先進的な情報技術の発展に先導的な役割を果たされました。1984年から3年間にわたっては、文部省科学研究費補助金による特定研究「多元知識情報の知的処理と統合化に関する研究」の研究代表者として、我が国における知識情報処理研究の飛躍的な発展に貢献されました。一方、国際的にも、1985年から3年間にわたって特定研究「日米科学技術協力（工学分野）におけるコンピュータ・ソフトウェアに係る調査研究」の代表者として、コンピュータ・ソフトウェア分野における日米の第一線研究者の交流と研究推進にあたるなど幅広く活躍されました。

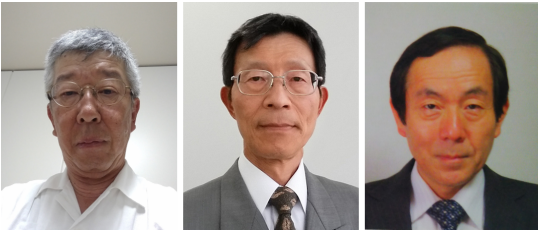
また、先生は、ご専門分野の広い学識を背景に、大学教育研究環境整備に、そして行政、学協会、産業界に、本当に多くの大きな貢献をされました。文部省学術審議会専門委員、文部省教科用図書検定調査審議会調査員を務めた他、学術情報センターシステム運営協議会委員、日本学術振興会電子計算機学術利用第135委員会委員、東海地区大型計算機利用協議会会長などとして、大型電子計算機全国共同利用体制、学術情報システムの整備に多大の寄与をされました。一方東京大学、名古屋工業大学、三重大学、豊橋技術科学大学などの非常勤講師として学生の指導にも当たられました。また、電子通信学会東海支部長、同学会インフォメーション理論研究専門委員会およびオートマトンと言語研究専門委員会の委員長、日本音響学会東海支部長、日本ME学会評議員、情報処理学会理事を歴任されました。さらには、情報処理学会東海支部を設立し初代支部長を務め事務局を研究室の中に置いて活動を支え育てたのも福村先生、必ずしも好意的ではない空気の中で先を見越し人工知能学会の創設に協力し初代会長を務められたのも福村先生でした。

今年は第21回ロボカップ世界大会が名古屋で開催されます。1997年の人工知能国際会議と第1回ロボカップ世界大会の名古屋開催に惜しみなく大きな支援をされた先生は、世界を回り成長して再び名古屋で開催されることを喜ばれたと思います。謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

（2017年3月23日記）

追記：二葉会と名報会から同時期に福村先生の追悼記事の寄稿を依頼されました。同窓生に等しく語りかけるのがよいと思い、二葉会誌「FUTABA」と名報会誌「MEIHOH」に、同文を寄稿いたしましたことご了解ください。

福村晃夫先生を偲んで



西川 保幸，国立 勉，水野 徳重（1974 年度修士）

福村晃夫先生のご逝去にあたり、情報工学研究科一期生として入学し、卒業してから何かと先生のお世話になった3人が、先生から頂いた甚大な御恩を振り返りながら、追悼文をしたためました。

福村先生に最初にお目にかかったのは、50年近く前の1970年、当時原子核工学科4年の時でした。電気・電子系の講義、コンピュータ言語を受講しに出向いたと記憶しています。内容は覚えていませんが、多分FORTRAN関連であったような気がします。卒業研究のテーマがコンピュータによるスペクトル分析だったことがきっかけでした。

その後、卒業して日立に入社し、ソフトウェア開発に従事しましたが、それまでの不勉強を痛感し、名大に情報系の大学院ができると聞き、受験した次第です。面接で某先生の質問の意図が理解できず固まっていた時、助舟を出していただいたのが福村先生でした。おかげさまで幸運にも合格でき、情報工学研究科一期生として福村研で、2年間を過ごすことができました。若くしてお亡くなりになられた吉田先生を中心にした毎週のディスカッション。それを福村先生は静かにお聞きになられながら、時として厳しいご指摘があり、たじろいだことを思い出します。また、修士論文発表の際、大先生を前に緊張の余り早口になり、また質問に窮していた時にも先生に助けて頂きました。

修士課程を終えてトヨタに就職してからは直接コンピュータとの係わりは減りましたが、丁度先生が人工知能学会の初代会長の時、講演をお願いしたことがありました。その際もお忙しい中、快く引き受けて頂きました。イラストを多用した手書きのOHPを使った講演を聞きながら、学生時代を懐かしく感じたことを思い出します。

先生との思い出で、やはり欠かせないのは、お酒に纏わる事です。大変お世話になりました。K君と3人でビールとお酒を20数本飲んだこともありました。また、夜半に先生を呼び出しながら、逆にご馳走になったことも何度かありました。感謝の言葉もありません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

（西川保幸）

私は4年次の卒業研究室の配属のとき、ソフトウェアの研究が中心の福村研究室を希望しました。配属を決定する日に定員以上の希望者が集まり、一部の学生が選に漏れる事態になりました。当時、ソフトウェアのことをそれほど理解して

いたわけでもなく志望動機薄弱な私でしたが、幸いにも数名が自発的に辞退してくれたように記憶しています。こうして福村研究室に配属されたことが私の人生の一つのターニングポイントになったとつくづく思います。というのは、福村研究室の先輩の多くがN T Tの研究所に就職されたので、私もN T Tの研究所に就職することになりました。そしてN T Tの研究所を退職して大学（大同大学）教員の道に進むことになり、幸いにも出身地に戻ることができました。N T Tを退職して大学に再就職した方が多くいますが、大学のポストは限られているので出身地以外の大学に進まざるを得ずに単身赴任している方が多いです。それを考えると私は運がよかったと思います。名古屋に戻ったことも一因となって名報会会長を務めることになりました。そして名報会の皆さんと知り合うことができました。

学生時代には先生と飲む機会もしばしばあったのですが、あまり熱心な研究生生活を送っていなかったのも、先生の偉大さを感じたのはむしろ卒業してからでした。N T Tの研究所で、そして再就職した大同大学で、先生のお名前が知れ渡っていることに気づかされたのです。また、先生の晩年にお見舞いに伺った時、お体が不自由であるにもかかわらず専門分野の研究そして執筆活動に意欲を示されていたことに大変感心しました。

先生には殆ど恩返しができないまま、お別れとなってしまいました。これまでありがとうございました。先生のご冥福をお祈り致します。

（国立 勉）

大学で研究室を選択する時にソフトウェアが重要になると思い福村先生の研究室を希望し、ご指導頂いてから40年余になります。卒業後も毎年、先生のお宅へ年始の挨拶に訪問してお手製のおでんを頂いたり、先生にご迷惑をお掛けしているのも考えず夜遅くまで歓談したり、仲人をお願いしに妻と訪問したことが思い出されます。

卒業して10年目に福村先生から訪米調査参加のお誘いを頂きました。当時勤務していた会社の社長が八校の卒業で先生と同年でしたので、3人で会食し社長の了解を得て、11日間の調査旅行に行きました。先生は日本酒がお好きで、ワシントンで日本料理店を見つけて飲み、先生が全員のお勘定を払って下さいました。

先生は産学で人工知能研究を推進する2つの組織の設立と運営にご尽力されました。一つは愛知県、名古屋市、産業界からの出資により1990年に設立した人工知能研究振興財団です。この財団では、毎年人工知能の研究者に助成金を授与してきました。またAIサロンと名付けた研究者の交流の場を設けて、研究発表会と立食パーティーを開催してきました。もう一つは産学で共同研究を行う人工知能高等研究所です。これは1991年に中京大学内に設立されました。私の会社（名鉄グループの（株）メイテツコム）は、この財団と研究所の両方に参画し、幸いにも鉄道ダイヤ作成の研究の助成金を頂きました。鉄道ダイヤはベテラン鉄道職員が鉛筆と定規で作成していましたが、コンピュータを使って作成することを目指し、研究所内に研究員を常駐させて福村先生および中京大学の先生方にご

指導頂きました。

先生は講義を行う際、OHP シートに解り易い手書きの絵を描かれました。これらの絵は「情報学 絵とき読本」(1996 オーム社)にも掲載されています。「情報と人間」から「情報と科学的方法」まで、先生が考えておられた概念が多数の挿絵で解り易く説明されており、講義を聞いた頃を懐かしく思い出します。

福村先生、長い間ありがとうございました。先生のご冥福をお祈り致します。

(水野徳重)

人間味あふれる福村先生を偲んで



名古屋大学大学院情報学研究科・情報学部
教授
間瀬 健二（1980 年度修士）

福村先生が2016年12月5日にお亡くなりになりました。さかのぼること2015年1月23日に予定した何回目かのNTT-OBによる福村先生を囲む会の2日前に、倒れられたとの急報があって以来、回復されて再び公の場に出ただけを願っていましたが、願いかないませんでした。

私は1978年度から1980年度の3年間、電気学科の卒業研究と情報工学専攻修士課程で福村先生のご指導にあずかりました。鳥脇先生のパターン認識グループの配属でしたが、福村先生にもご指導いただきました。その後、電電公社（現在のNTT）に就職し、京都のATRを経て2002年8月に名古屋大学に職を得て現在に至っています。先生には公私にわたって大変お世話になりました。

最初は研究室に入って、大学院に進学するか卒業するかの決断のときでした。すでに当時から6、7割は進学する学生がいたころでしたが、長いつきあいの彼女がいて、先生のところに相談にいきました。「えっとー、まあ、進学したら2年間ゆっくり考えられる時間ができるよ。」との一言で、人生が決まりました。いま、同じような相談にくる学生には、同じアドバイスをしています。その彼女とは就職1年後に結婚となり、福村先生ご夫妻に仲人をお願いしました。夫婦のなれそめをレポート4枚くらいにまとめてお渡ししたところ、仲人のご挨拶で、30分のスピーチで全部紹介されてしまいました。お祝いにノリタケの食器セットを頂戴しました。まだ、名残りの皿が少し残っています。そして、子供が入学するときにはランドセルも頂戴しました。仲人をお願いした諸先輩も同じお祝いをいただいたと伺います。また先生のお宅では、毎年正月におでんパーティが開かれ、OBが押しかけておりました。同期の後藤君、岩井君、中里見君らと連れ添って毎年おじゃましていました。自宅で学生を招いてBBQをやるようになったのも、卒業生の先輩後輩のつながりを貴重と思うのも、まさしく福村先生の薫陶のゆえです。

大学院を卒業してからは、主にアカデミックな機会でお世話になりました。1997年に名古屋国際会議場で、AIの国際会議IJCAI-97と第1回ロボカップ世界大会が開催され、私も京都から駆けつけて参加しました。大分あとから、福村先生が開催に奔走されたことをお聞きしました。横浜開催だったのがうまく行かず、名古屋で引き受けることになったとか。開催のために、先生が3500万円の予算確保の裏書をされたとのこと（詳細は、中京大学人工知能高等研究所ニュース36号[1]）。頼られる先生ならではのエピソードです。今年2017年7月、20年ぶりに、成長したロボカップが名古屋で開催されること、また、初代会長をされた人

工知能学会も5月に名古屋で第31回全国大会が開かれます。福村先生も楽しみにされていたことと思います。見て頂けないのが残念です。

私が名古屋大学に戻ってきてからは、栢森情報科学振興財団のKフォーラムや20周年行事の準備、研究助成の審査委員会などで先生をお手伝いする場に呼び出していただいたことを本当にうれしく思います。栢森財団は、ダイコク電機の創業者が福村先生のアドバイスで学界に貢献する場として創立した財団と聞きました。20年にわたる研究助成や周年行事だけでなくKフォーラムという少人数での研究ミーティングの場で、AIやITの研究者の交流の場を設定されました。最近では、人工知能学会創設に関わられた大御所の先生方が聞き手になってリゾート地でゆったりと研究交流する場で、フォーラムに呼ばれることは若手にとっては栄誉でもありました。現在活躍されている多くの方がフォーラムや財団の行事で講演をされています。名前を挙げたらきりがありません。福村先生には人を引きつける不思議な魅力がありました。

福村先生は身体性ということに非常にこだわっておられました。人間の知能発達と身体が不可分で人工知能においても身体性は知能獲得に重要であるから、というのが当初の私の浅い理解でした。しかし、最近、先生の著書や対談を読むにつけ、情報をもっとウェットで人間くさいものであるとの基本的な認識に立って身体性を語っておられたことに気づきました。情報の「意味」を人間の「いのち」に類推して、「いのち」を扱うように情報処理が意味を損なわず意味を生かす物でなければならないという、福村先生の強い信念があたりだったのだと思います。そのお考えの一端は前述の人工知能高等研究所ニュース39号[2]の記事で伺い知ることができます。先生ご自身が描かれた味わい深いイラスト満載の先生の著書[3]を読み直して先生と対話していけば、新しい発見が出来そうな予感がします。

情報技術がただのものづくりの工学でなく、人を取り扱う技術であることを肝に銘じて今後も教育研究を進めていきたいと思えます。甘えて弱音を吐いても「なーにをいっとるか！」と優しく叱咤していただける先生でした。福村先生、長い間、ご指導ありがとうございました。ゆっくりお休みください。



最後になってしまったNTT-OB 福村先生を囲む会の写真
(2014.5.27、神楽家にて)

【後列】 国立、稲垣、成瀬、伊藤、大野、後藤、間瀬

【前列】 末永、森下、福村先生、足立、近藤 (敬称略)

【参考文献】

- [1] http://www.iasai.sist.chukyo-u.ac.jp/pdf/iasai_news36.pdf
- [2] http://www.iasai.sist.chukyo-u.ac.jp/pdf/iasai_news39.pdf
- [3] 福村晃夫著, 情報学絵とき読本, オーム社, 1996.

福村先生を偲んで



中電シーティーアイ
取締役

松田 信之（1981 年度修士）

その日

ふっと湧いてくる怖れを何度も振り払ってきたが、ついにその日が来てしまいました。机上のガラス下に挟んである先生の写真は、何か語りかけているようで、その言葉は日によって違うも、暖かく優しい目はずっと変わっていない。至らぬ自分が先生にどれだけお世話になり、成長させていただいたか…

弱者にやさしく

私は学生の頃、父の病気のため学部4年間は生活費を自分で稼いでいました。大学院に進んだ私に福村先生はそれとなく留学生のチューターのアルバイトを紹介してくれました。就職の際には、ある地方新聞社の内定が決まりかけていたのですが、たまたま地下鉄で先生とお会いし、「松田君、中部電力もあるよ。社長にはなれないけれどね」と声をかけていただき、進路を決めました。先生との一言が私の人生の転機となっています。

社会人になって交通事故のトラブルに巻き込まれたとき、頼る人が無く思い余って先生にお電話してしまったのですが、親身になって相談に乗ってくれました。弱い人を決して見捨てない、そういう先生でした。先生は私の弱さを見抜いていらしたのでしょうか、私が課長職になったとき「あの松田君がホント中電の課長さんになったんだねえ～、中電の課長さん昔は偉い人だったんだよお～」とお褒めの言葉を戴きましたσ(^_^;)。

キングメーカー

中部電力でも先生との出会いで大きく人生を飛翔させた人がいます。元中部電力社長・会長、元中経連会長の川口文夫です。川口は事務系にも関わらず情報システム部を経験し、第2次人工知能ブームの際には福村先生（当時名古屋大学大型計算機センター長）を団長とする米国視察団の一員として参加しました。川口にとってこの邂逅が先生を生涯の師と仰ぎ、社長へ導く出会いとなったのです。川口はのちにコンピュータ・テクノロジー・インテグレイタ（CTI、現中電シーティーアイ）を設立、その後も福村先生との交流は続き、私は幸運にもそのお世話役を担うことになりました。当時中電の研究所にいた私は、川口に白羽の矢を立てられ、米国の Boeing Computer Services AI スクールに派遣後、CTI に出向・着任したからです。この頃は福村先生が人工知能学会を設立され名古屋国際会議場でマービン・ミンスキー氏を呼んで AI 国際会議を開催するなど、中部の IT がとても元気で、CTI も先生のお手伝いをいろいろとさせていただきました。

川口は CTI の経営を軌道に乗せた後中部電力に戻り常務に昇進、末席から上席役員 16 人を抜いて社長に抜擢されたのです。CTI 時代、川口が福村先生の腸閉そく入院でお見舞いに伺った際、奥様が「この人きっと社長になるわよ」と言われたそうです。もう一人福村先生の教え子で同じように言われた方がいました。NTT 西日本社長になられた森下俊三氏です。ちなみにのちに奥様は「松田君は部長クラスにはなれるかもよ」とご主人より高い過大評価をいただき、ただただ感謝でした …。

地域の IT チャレンジを先導・支え

福村先生は日本の IT 分野を切り開いてこられ、最後までそのチャレンジングな姿勢は変わりませんでした。先生の学識と人望に、当社をはじめ地域の産業界も頼りました。東海エーアイ研究会、人工知能研究振興財団、科学技術交流財団メディアアカデミー、東海インターネット協議会、栢森情報科学振興財団等数々の推進機関の代表に奉られ、その人柄ゆえ誰もが気楽に参加できる場を作られ、地域の IT 化を支えてこられました。

川口の履歴書「不如守中」※には、『福村先生が各地からの招聘を断って名古屋の地に留まって、若い学者の育成や地域の情報化の推進に努められたことは中部地方にとって誠にありがたいことであった。東海情報通信懇談会を設立され、初代会長としてこの地域の情報通信の技術普及と啓蒙に果たされた功績は大きい』としたためられています。東海情報通信懇談会長は先生のたつての要望で川口中経連会長に後任を託され、以降中経連会長の役職の一つとして現在も引き継がれています。

※「不如守中」中部経済新聞連載マイウェイを製本。老子の言葉で「中を守るに如かず」。日本人は常に高（たかみ）を望んでやみませんが、昔の中国では中は非常に大切な概念。「中部を守るに如かず」も掛る。

日本酒を愛し権威を嫌った人生の恩師

奥さまがお亡くなりになり、おひとりになられた後も、先生に同じくお世話になった中京大学鈴木先生と私の三人で、よく寿司屋に行き、四方山話をさせていただきました。先生の食がだんだん細くなる中、冒頭の怖れがかすめるようになりましたが、相変わらず日本酒はお好きで、その強さに安心感を覚えながら、いつまでも続くことを願っていました。私や鈴木先生のような若干(?)の曲者に、先生は権威や畏れを感じさせることなく最後まで愛情を注いでいただきました。お正月三ヶ日におでんを煮て教え子を待って見えたこと、仲人の子供にはランドセルをプレゼントされ、三回も我が子にランドセルを背負わせ訪ねたこと、遠い中津川の我が家に旅してもらったことなどなど、走馬灯のように思い出されます。十分な恩返しもできず、もう賀茂鶴を一緒に飲めないその日がきてしまったことに、深い喪失感が続いています。

以 上

福村晃夫先生と中京大学で過ごした日々



中京大学工学部
教授

長谷川 純一（1978 年度博士）

2016年12月5日、福村晃夫先生が他界されました。先生は、2015年1月に持病が再発して以来、別のご病気が重なったこともあって、何度か入退院を繰り返しておられました。お見舞いにお伺いしたとき、会話はしっかりとされていたため、また私たちの前に元気なお姿を見せていただけるものと思っておりました。しかし、その願いもむなしく、ついに帰らぬ人となりました。私は名古屋大学と中京大学を通じ、先生と43年間ご一緒させていただきましたが、ここでは追悼の意を込めて、先生とご一緒に中京大学へ赴くことになったいきさつとその後のことを紹介させていただきます。

福村先生に初めてお会いしたのは、私が福村研究室に卒研生として配属された1973年の春でした。その頃の福村研究室には3つの大きな研究グループがあり、それぞれを当時若手の稲垣康善先生、鳥脇純一郎先生、吉田雄二先生が指導されていましたが、福村先生はどのグループのディスカッションにも毎週参加されていたと思います。その後、私は卒業研究で行った医用画像認識の研究を続けるため、そのまま設立間もない情報工学専攻に進学し、博士課程を修了した1979年、名古屋大学の工学部助手に採用していただきました。もしあのとき先生が情報工学専攻を立ち上げていて下さらなかったならば、私はおそらく大学院へは進まなかったと思いますし、大学の教員になることもなかったと思います。

福村先生のご退官も近い1986年のある日、先生から、“私と一緒に中京大学に行ってみないか”と誘われました。その頃の中京大学には理工系学部がありませんでしたから、私の周囲には、慎重に考えた方がよいという意見もありました。しかし、“新しい環境、新しい視点で人工知能研究をやってみようと思う。それにはむしろ理工系を持っていない大学の方がよい”という先生の言葉に共感し、決断しました。

1987年、準備のため、先生より一足先に中京大学に赴任しました。思っていた通り、中京大学には理工系らしい環境も雰囲気もまったくありませんでしたから、これからどうなるのかと少し不安になりましたが、福村先生の新学部構想はそんな私の不安を吹き飛ばすくらい素晴らしいものでした。1990年、先生は新しい学部を情報科学部と名付けられ、情報科学科と認知科学科の2学科構成でスタートさせました（のちに、メディア科学科が加わります）。とくに、認知科学科は日本で初めての学科で、そのヘッドには当時認知科学会の初代会長をしておられた戸田正直先生が就任されました。その当時、福村先生も人工知能学会の初代会長をされていたから、情報科学部の設立にこの分野のトップ2名が関わ

られたこととなります。これは全国の関係者の間でも大きな話題となりました。情報科学部の基本理念は、2つの学科がともにその目的を人工知能の研究教育におきつつも、前者はコンピュータ科学・情報工学の立場から、後者は認知科学・心理学の立場からアプローチし、最終的に合流（統合）するという斬新なものでした。さらに福村先生は、より高いレベルの研究教育を行う場として、1991年に人工知能高等研究所、1994年に情報科学研究科を創設されました。とくに、人工知能高等研究所の建物は企業からの寄付で建築し、共同研究のために富士通研究所や日本電装など大手企業4社を入居させました。また、公開講座ソフトウェアシリーズを名古屋市科学館と共催でスタートさせ、情報科学や人工知能研究の普及・啓蒙にも努められました。先生は日頃から、“大学は自由に研究ができる場所でなければいけない。とくに研究所は研究者たちの「牧場」となるべきだね”と口癖のように仰っていました。情報科学部や人工知能高等研究所の設立には、そのような先生の思いが強く現れているように思います。

2002年のある日、また福村先生から、“中京大学にもう一つ新しい学部をつくって見ないか”と誘われました。生命システム工学部です。先生はその数年前から、“情報化の流れは止めようもない。しかし、過度の情報化によって技術や社会の仮想化が極端に進めば、それは人間の生命や身体（からだ）とは無縁のものになる。そうならないためには、「技術の身体化」あるいは「身体性のある技術開発」が必要である”という趣旨の発言をされていたから、それが生命システム工学部の構想につながっていることはすぐに理解できました。先生は、“身体性は多くの意味を含むから、その研究教育にはいくつかの異なる視点が必要になる。例えば、その教育内容を、「実身体（体育・スポーツ系）」、「仮想身体（情報・メディア系）」、「機械身体（機械・ロボティクス系）」という3つの柱で考えるのはどうか”と提案されました。私もその考え方に賛同し、設置準備のお手伝いをさせていただくことにしました。しかし、何しろまったく新しい概念の学部ですから、教育課程はもとより、教員確保、設備選定、学生募集のいずれを取っても簡単な話ではありませんでした。とくに教員確保では、知り合いの教員や研究者から候補者を紹介していただき、その後個別面談に進むという形を取りましたが、紹介者はすべて先生が人選されました。優秀な教員の確保には、優秀で信頼できる紹介者が不可欠であることを行動で教えていただいた気がします。2004年に発足した生命システム工学部は、その後学部再編等で情報理工学部に統合され、現在は工学部の一部になっていますが、そのときの教員の多くは現在も工学部教員として活躍されています。

今年、中京大学の理工系（学部、研究科、研究所）はいずれも発足から四半世紀を迎え、2017年2月17日にその記念式典を開きました。残念ながら福村先生にご臨席いただくことは叶いませんでしたが、先生が中京大学に蒞かれた理工系教育の種が、いま四半世紀の時を経て大きく成長したことを先生は喜んでおられると思います。謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

追悼特集 2 本多波雄先生



本多波雄先生 ご略歴

大正 11 年 10 月 10 日	出生
昭和 21 年 9 月	東北帝国大学工学部大学院特別研究生 修了
昭和 21 年 11 月	東北帝国大学電気通信研究所助手
昭和 26 年 2 月	東北大学工学部助教授
昭和 34 年 11 月	東北大学工学博士 学位取得
昭和 35 年 6 月	東北大学電気通信研究所教授
昭和 35 年 7 月	東北大学工学部教授 併任（昭和 51. 3 まで）
昭和 51 年 4 月	名古屋大学工学部教授
昭和 51 年 4 月	東北大学名誉教授
昭和 53 年 5 月	文部省大学局工学視学委員（昭和 57. 3 まで）
昭和 56 年 4 月	豊橋技術科学大学工学部教授
昭和 56 年 5 月	名古屋大学工学部教授 併任（昭和 57. 3 まで）
昭和 57 年 4 月	豊橋技術科学大学副学長
昭和 57 年 8 月	文部省大学局工学視学委員（昭和 59. 3 まで）
昭和 59 年 4 月	豊橋技術科学大学学長
昭和 60 年 3 月	文部省高等教育局工学視学委員（昭和 62. 2 まで）
平成 2 年 3 月	豊橋技術科学大学学長任期満了退官
平成 2 年 4 月	豊橋技術科学大学名誉教授
平成 28 年 12 月 30 日	逝去（95 歳）

受賞

昭和50年11月 石川賞（財団法人日本科学技術連盟）
平成8年4月 勲二等旭日重光章
平成13年10月 大川賞（公益財団法人大川情報通信基金）

本多波雄先生を偲ぶ



名古屋大学名誉教授
稲垣 康善（特別会員）

本多波雄先生は、去る 2016 年 12 月 30 日にご逝去されました。享年 95 歳でした。この 1 月に、ご長女の郁子様から、「昨年夏頃までは元気に過ごしていましたが秋に誤嚥性肺炎を患い急激に体力が落ち新年を迎える事は叶いませんでした」とお葉書をいただきました。先生の心温かい真摯なお話しをお聴きすることが叶わなくなった、と淋しさがこみ上げて来ましたが、百寿に近いご長寿を全うされたのだと思い直し、衷心より先生のご冥福をお祈りしました。

私が本多先生に最初にお目に掛ったのは、記憶に間違いが無ければ、1962 年の秋、電気通信学会全国大会の講演会場であったと思います。その時、東北大学電気通信研究所教授の本多波雄先生と私の指導教授であった宇田川久先生と愉快そうに講演開始の間際まで談笑しておられたお姿でした。その時には、その後 3 年もたない 1965 年の 5 月に宇田川先生が急逝され、本多先生に宇田川研究室で情報分野の研究を始めていた大学院生がご指導をいただくことになるとは思いませんでした。私はその院生の一人でした。その時から、本多先生は、年に数回、東北大学通信研究所のある仙台から名古屋まで来てくださって研究報告を聴いてくださり鋭いディスカッションと適切なサジェスションを通して研究指導をしてくださいました。多くの同窓生が記憶に残っていることと思います。私自身は、まだ大学院生であったのに東北大学通信研究所主催のシンポジウム「ARTIFICIAL INTELLIGENCE」での講演の機会を、そして形式言語理論の研究開始へのきっかけを与えてくださり、また学位論文作成に際しては本当に丁寧にご指導いただきました。先生にいただいたご恩は忘れることができません。

先生は、1922 年 10 月 10 日のお生まれで、旧制第八高等学校から東北帝国大学工学部通信工学科に進まれ 1944 年ご卒業、そして 1946 年同大学工学部大学院特別研究生を修了後、同大学電気通信研究所助手に任じられ、1960 年には同研究所の教授に就任され「情報理論」の名を冠する我が国で初めての講座を担当されました。その後、電気通信研究所所長、同大学評議員を歴任され同大学の管理、運営に参画されました。その後 1976 年に名古屋大学工学部教授となられ電気系教室で情報工学分野の教育研究を指導されると共に豊橋技術科学大学の設立準備に尽力されました。後に 1981 年、豊橋技術大学に移られ、副学長を経て 1984 年に同大学の学長に就任され管理・運営の中樞を担われました。さらに、1990 年からは名古屋商科大学の大学院経営情報学研究科長に就任、同大学の経営情報学部長も兼任され、経営情報学の教育と指導にあたられました。

本多先生が、名古屋大学に在任された期間は 1976 年から 1980 年までの 5 年間という短い間でしたが、上に紹介しましたように 1965 年以来仙台から名古屋

大学においで下ったことを思えば、本当に長年に亘って名古屋大学の情報工学分野の研究指導に尽力して多大の貢献をいただいたと思います。名古屋大学に在任の5年間、先生は電気系教室所属でしたが、情報工学教室所属の福村晃夫先生と共に本多・福村研究室として一体となって情報分野の教育研究を盛り上げて下さいました。学生の方も、電気、情報の両専攻の学生が一緒に、本当に賑やかで活気に溢れていました。その頃に先生の薫陶を受けた俊秀とその後継者が、今日、学界、産業界で指導的立場になって第一線で活躍しています。

忘れられないのは、本多先生が名古屋に着任されてから、先生を代表に、100回に近い開催を重ねた「情報論談話会」です。先生を囲んで最新の情報通信の基礎理論に関わる話題を聴講し、その後で懇親会を持ちました。名大、名工大、岐阜大、三重大、豊技大の持ち回りで、都合の良い土曜日の午後の開催でした。時には、スピーカーとして、この地域以外や海外からの研究者にも参加いただきました。東海地域の大学に在籍の情報基礎理論研究者の情報交換の場となり、また先生を囲んでの懇親会では先生の味わい深いお話しを伺うことができました。

先生は、情報通信の基礎科学研究のわが国のパイオニアでした。早くから情報通信分野の基礎科学の研究推進が不可欠であることを見抜かれ、理論計算機科学の基礎となる、通信の数学理論、いわゆる情報理論、およびオートマトン・言語理論の両分野で時代の先駆けとなる研究を行って数々の業績をあげられました。

まず、情報理論の分野では、「雑音のある通信路通していかに通信を行うか」という問題に関して、先生は、1948年に発表されたC.E. シャノンの論文「A mathematical theory of communication」に着目され、雑音のもとでの通信に関して大きな研究成果をあげておられます。その中でも、特に、ダブル・サンプリングの発想や逐次誤差訂正符号と群符号の創案は、独創的かつ画期的な成果として、高く評価されています。1960年に日刊工業新聞社から出版された本多先生の著書「情報理論入門」は、その当時数少ない情報理論の教科書で、今日まで使われ続けています。

さらに、先生は、1965年当時に、すでにオートマトン理論と言語理論を計算機科学の基礎となる重要な部分と位置づけた上で研究を開始されました。有限オートマトン、プッシュオートマトン、形式文法、可変論理回路、ファジイ言語、セル構造オートマトンに関して研究を展開し卓越した成果をあげられ、これらの理論研究の成果をいち早く、日本から欧米に向けて発信しておられます。これらの優れた研究成果は、シャノンの情報理論、フォン・ノイマンの自己増殖オートマトン、ヴァリアントの各種決定問題、ザディのファジイ理論、マックノートンの正則表現のスターハイト問題など、この分野の世界的な研究者の成果と並んで、理論計算機科学の発展に大きな貢献をしています。このような、我が国の情報理論およびオートマトン・言語理論に関する先駆的かつ卓越した業績にたいして、大川賞を受賞されました。

先生は、以上のような、一連の大学における優れた研究業績および教育に関する貢献に対し、東北大学、名古屋大学、豊橋技術科学大学、の各大学から名誉教授の称号を授与され、さらに1996年には、勲2等旭日重光章を受章されました。

本多波雄先生の真摯な研究への先見性と情熱は、薫陶を受けた多くの俊秀とその優れた後継者を通し広く受け継がれていくと思います。謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

(2017年4月18日)

追記：名報会と二葉会から同時期に本多先生の追悼記事の寄稿を依頼されました。同窓生に等しく語りかけるのがよいと思い、名報会誌「MEIHOH」と二葉会誌「FUTABA」に、同文を寄稿いたしましたことご了解ください。

本多先生の思い出



名古屋大学名誉教授
坂部 俊樹（特別会員）

今年の年頭に本多波雄先生ご逝去の報に接し、私が学生、助手のころの本多先生の思い出が脳裏を巡りました。直前には福村晃夫先生も逝去され、情報分野の黎明期を牽引した偉大なお二人の先生の他界に時代の移り変わりをしみじみと感じた年明けでした。

本多先生に初めてお目にかかったのは、うろ覚えですが、私が修士課程の学生の頃ではなかったかと思います。当時、私は工学部電気系教室の福村先生の研究室に所属していました。福村研のオートマトングループ（稲垣康善先生がリーダーでした）のディスカッションと呼んでいた研究セミナーにゲストとして本多先生が何ヶ月に一度の割合でおいでになっていましたので、その際にお目にかかりました。また、直接に指導いただいていた稲垣先生から勧められて本多先生の著書「オートマトン・言語理論」でオートマトン理論の勉強をしたのもその頃でした。

その頃の思い出の一つは、本多先生が出席下さっていたディスカッションで私の研究発表を聞いていただいたときのことです。仙台からの移動でお疲れもあったのか、私の話が始まるとすぐに目を閉じてうとうとされていました。1時間ほどして私の発表が終わるころ、おもむろに質問とコメントをいただき、何処かに論文として発表してはどうかとの示唆もいただきました。質問とコメントは正に的を得たもので、当時の私にとっては驚いたというか狐につままれたというか非常に印象に残るできごとでした。まだ研究のケの字をかじったばかりの私でしたが、本多先生に研究者としての大きくて圧倒される何かを感じた一瞬でもありました。

もう一つ、私にとっては恥ずかしい思い出があります。いつの頃かははっきりしませんが、博士課程の学生のころだったと思います。輪講か何かで私が担当した部分に、言語 $\{a^n b^n c^n | n = 1, 2, \dots\}$ が文脈自由言語ではないことがよく知られた事実として取り上げられていました。本多先生から「それは何故？」と質問され、答えられなかったのです。本多先生の教科書でオートマトンの勉強をしたにもかかわらずです。「こりゃだめだ」と言われて、ガックリしたのを覚えています。本を読むときは徹底的に分かるまで読むことが大切だと身にしみたのはその時からです。今でも忘れられない本多先生から教えて頂いたことの一つです。

本多先生が東北大学から名古屋大学工学部の電気系教室に異動されたころの思い出としてソフトボールのことがあります。当時は、電気系教室の研究室対抗のソフトボール大会が毎年行われていて、本多研と福村研は合同チームで参加し

ました。試合になると本多先生は忙しい中でも審判を買ってでてください、厳正公平な判定をされながら和気あいあい楽しい雰囲気を演出してくださいました。学生達と一緒にソフボールを楽しんでいる姿にふんわりと温かみのあるお人柄を感じたのは私だけではなかったと思います。

思い出すままに本多先生の思い出を書きつつ改めて気づいたことは、短期間でしたが本多先生の近くにおいて先生から受けた大きな影響が間違いなく私の教員人生の礎になっていたことです。心より感謝申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

本多波雄先生の思い出



平田 富夫（特別会員）

昨年12月に敬愛する本多先生がお亡くなりになったと聞いたときはただただ呆然としました。本多先生には、私の東北大学での学生時代から、豊橋技術科学大学、名古屋大学を通してずっとお世話になりました。本多先生は昭和56年に名古屋大学から豊橋技科大に移っておられますが、私はちょうどそのとき大学院を修了して豊橋技科大に助手として赴任し、本多先生の研究室セミナーで勉強させていただきました。本多先生は翌年、副学長になられ、2年後には学長に就任なさいましたので、ますます忙しくされておられました。その間、私の結婚のお仲人もお引き受けくださいました。

私の学生時代は、東北大学電気系の先生方、とくに教授の先生は非常に権威があったと思います。大物の偉い先生が大勢おられました。本多先生は、国際的な業績が多く聡明な先生という評判でしたが、権威主義的なところがなく、謙虚でおだやかな先生でした。人格識見に優れているのはもちろんのこと、どこことなく品格が感じられるのです。それはおそらく本多先生のお育ちになった“環境”が大きく影響しているのではないかと思います。

本多先生のお父様はエフエム愛知会長、陶芸研究家として有名な本多静雄さんです。平成11年に亡くなりましたが、生前は陶芸家の加藤唐九郎や洋画家の杉本健吉らと親しくされた文化人です。広大なクヌギ林のある平戸橋のお屋敷で毎年春に園遊会（観桜会）を催したというのは有名です。本多先生のご自宅は、このクヌギ林に隣接して建てられていて、あるときお宅にご挨拶に伺ったときに、たまたま本多静雄さんが居間にいらっしやっご挨拶をする機会がありました。普段ですととてもお目にかかれるような方ではないので緊張してしましたら、思いがけず気さくにお話をしてくださっておだやかなひと時を過ごしました。どのようなお話をなされたのか詳しくは思い出せないのですが、昔は田舎に出張する社員が現地で若い女性と懇ろになることがよくあったというような話で、そのとき私は田山花袋の「名張少女（なばりおとめ）」を連想したのを覚えています。とてもさばけた方というのが私の受けた印象です。狂言を愛されて、ご自分でも戯作をなさいますので、人間の持っている様々な面を肯定的に捉えていらしたのでしょう。

文芸評論家の本多秋五さんは本多先生の叔父さんにあたります。本多先生のお話では、とても勉強家で、毎日夜遅くまで勉強をしておられたそうです。本多秋五さんのお名前を聞いて、私が学生の頃に（中央公論か文芸春秋だと思いますが）ある雑誌で有名な論争があったのを覚えていて、それを話したら、本多

先生から、あれは江藤淳との論争だったと教えていただきました。江藤淳は有名な評論家で、当時はたしか東工大でも教鞭をとっていたと思います。後で調べましたら、そのときの論争は第二次世界大戦における日本の降伏は“無条件”であったかどうかということで、二人のあいだで激しい議論の応酬がありました。

本多先生は、東北大学で研究所所長、豊橋技術科学大学で副学長、学長と管理職を歴任しておられますので、学生や一般教職員からみるといわゆる体制側に属すといえますが、保守的なところはあまりなく、心情的にはリベラルであったと思います。折に触れて本多先生がおっしゃられた言葉から推察するのみですがそれをいくつか紹介しましょう。

本多先生が名古屋から仙台に研究指導にみえたときのことで（先生は名古屋大学に移られてからしばらく東北大学も兼務しています）。東北大の電気通信研究所にある本多研の談話室で、隣の研究室の先生（武内義尚先生）とお話しされていました。お二人は昔の出来事を懐かしく思い出されて大きな声でお話されていましたが、話が進んで話題が昔の学生運動にふれたときに、たまたま東北大学でのイールズ事件のことになりました。これは、戦後間もないころに、GHQの指令によるレッドパージを大学で喧伝するためにイールズ氏が東北大学で行おうとした講演会を、学生が反対して中止させたという事件です。本多先生は「あれは痛快だったねえー」とおっしゃっていました。イールズ事件のころには先生はすでに大学の若手教員でしたので、権力の理不尽な要求に対し果敢に立ち向かった学生への共感を表したのだと思います。

子供たちの成長をみていただこうと、家族で本多先生のお宅にご挨拶に伺ったときのことで。本多先生はテレビの昼のニュースをみていらしたご様子で、居間から出ていらして、「香山健一さんがなくなった」とおっしゃいました。香山健一さんは東大の学生だったときに全学連委員長で、たしか砂川闘争を指揮した方です。その後保守派の論客へと転向し活躍しました。本多先生は、「彼についていって、その後の人生を大きく変えた人がたくさんいることを思うと複雑な心境だね」とおっしゃっていました。香山健一さんが中曽根内閣のときに臨教審委員として力を発揮していた時期は、本多先生が豊橋技科大の学長職につかれておられましたので、香山さんに対してことのほか複雑な思いをもったのかもしれませんが。



家族で本多先生宅を訪問

このような先生のお人柄を慕い、門下生が全国から集って先生を囲む会が何度ももたれました。本多先生はいつもにこやかに（そして少し大きな声で）談笑されていたのを思い出します。最後に、これまでご指導いただきましたことに深い感謝を申し上げるとともに先生のご冥福をお祈り申し上げます。

本多先生から頂いたもの



山下 雅史（1979 年度博士）

私が京都大学の修士課程を修了して名古屋大学の博士課程に進学したのは、1977年の春で、指導教官をお引き受け頂いたのは福村先生でした。しかし、当時の名古屋大学では、関連する教官の下に配属されたすべての学生はその出自に関わらず、計算機システム、計算機応用、理論計算機科学の3つのグループのどれかを選択し、それぞれ吉田先生、福村先生そして本多先生の指導を賜るということになっていましたので、分散計算の理論に興味があった私は、自然に理論計算機科学グループに所属し、本多先生および稲垣先生のご指導を賜ることになったのです。

私が京都大学から名古屋大学に移ることになった直接的な理由は、私の指導教官であった清野先生のご退官が間近に迫っていて、博士課程の学生を取ることができなかったことです。しかし、当時も今も優秀な学生は引く手あまたですから、当時の私は当時の先生のご興味を惹かなかったことが大きな理由です。（なぜ、名古屋大学に移動したかということについては、多分、一冊と言わずとも、本が半冊書けそうな長い話がありますがそのためのスペースがありません。）多少の言い訳を申しますと、私が京都大学の先生の興味を惹かなかった小さな理由は、私の修論のテーマが停止しない計算の意味論で、京都大学の先生の専門外だったことにあります。実は、「計算」が意味を持つための大前提はそれが「停止」することで、先生方からその事実を教えて頂いたことを覚えています。（そんな常識すら当時の私は知らなかったのです。）しかし、そのような常識外れのテーマであっても、その研究を積極的に指導して頂き、それは今でも私のテーマです。研究は論理にさえ従えば、後は完全に自由であり、特に常識に従う必要がないということで、私はずっとその教えを守って研究を行ってきました。私は、よく自分の成長課程を、京都ではプライド、名古屋では日本語、豊橋（技術科学大学）では英語を頂いたと説明して来ました。名古屋で日本語を頂いたというのは、研究に最も必要な日本語の正確な使用法を教えて頂いたという意味です。教官にとってゼミを行うことの最大の意義が学生に日本語を教えることだという認識は、私の学生指導においても不変で基本的でした。

研究テーマを選択する基準と日本語教育の重要性だけにしか触れなかったなかつたのですが、考えてみると、私が行って来た研究指導のスタイルは、学生に対する挨拶の仕方を始め、すべてが本多先生のスタイルを模倣したもので、先生から頂いたものでありました。最近、麻雀に付き合ってくれる学生が居ないので、先生のスタイルを模倣したくてもできなくて残念に思っている所です。

本多波雄先生を偲んで



名古屋大学大学院工学研究科
教授
宇野 洋二（1977 年度修士）

本多波雄先生にたいへんお世話になった者の一人として、先生のご冥福を祈りつつ、思い出を書かせていただきます。私が本多先生に直接ご指導いただいたのは、40年も前の大学院での1年間でしたが、先生がよく響くお声と笑顔、そして闊達な語り口を昨日のように思い出することができます。

私は理学部の物理学科を卒業し大学院で情報工学科へ入学しました。その始めに指導教官の稲垣康善先生から、本多先生のご著書の「オートマトン・言語理論」をよく勉強するようにと薦められました。ご存知のように、この本にはチューリングマシンから形式文法に至る数学的な理論が展開されていて、初めてこの分野に踏み込んだ私にはなかなか手強く、何度も何度も繰り返し読み込んでようやく有限オートマトンの定式化を理解することができました。どういう意味かなとあれこれと書き込みをしましたこの本を今眺めていますと、論旨の美しい素晴らしい本に出会えたという感慨深いものがあらためて沸いてきます。私にとって本多先生はこの著作を通じたまさに雲の上の存在でしたが、その先生が名古屋大学の情報工学科に赴任されるとお聞きしたときには、わっと気分が高揚したことを覚えています。その頃、本多福村研究室と呼んでいましたゼミの思い出は一杯ありますが、自分の稚拙な研究進捗報告の場面などを思い出すと赤面してしまいます。私は出来の悪い学生で、自分でもきちんと整理できていないぼんやりした研究内容を発表してしまったことも度々あるのですが、本多先生はそんな発表に対しても要点をスパッとつかみ質問やコメントをしてくださいました。ゼミの後で不思議と自分の研究が整理されていくのを感じ、とても有り難く思いました。

私は当時、研究などに行き詰まったり、日常でうまくいかないことなどがありますと、気分転換のためにキャンパス内をよく散歩しました。そして豊田講堂からグラウンドへ抜ける林道などをぶらぶらと歩いていますと、散策しておられた本多先生に偶然お会いすることが何度かございました。その際にも先生から笑顔で一言二言お言葉を掛けていただいたのですが、それだけで何か勇気が沸いてきたのは不思議です。そのときには散歩の途中でお会いしただけで嬉しい気持ちになっていましたが、それにしましても本多先生が何をご覧になりどんな思索にふけりながら歩いておられたのか、失礼を顧みずに一度尋ねてみればよかったと、先生の面影を辿りながら思うこの頃です。

会員数 (2016年4月1日現在)

正会員 2,025名

特別会員 122名

名報会役員

	(名前)	(最終卒業・修了年度)	(所属)
会長	佐藤 銀康	1979年度修士	NDS インフォス (株)
副会長	長谷川 純一	1978年度博士	中京大学
副会長	鈴木 敦	1992年度学士	(株) メイテツコム
本部幹事 (庶務)	松原 茂樹	1997年度博士	名古屋大学
本部幹事 (庶務)	竹内 義則	1998年度博士	大同大学
本部幹事 (庶務)	目加田 慶人	1995年度博士	中京大学
本部幹事 (庶務)	大久保 弘崇	1996年度博士	愛知県立大学
本部幹事 (庶務)	小尻 智子	2002年度博士	関西大学
本部幹事 (庶務大学担当)	外山 勝彦	1988年度博士	名古屋大学
本部幹事 (庶務大学担当)	朝倉 宏一	1993年度修士	大同大学
本部幹事 (庶務工学部同窓会担当)	大島 哲也	1978年度修士	(株) トヨタコミュニケーションシステム
本部幹事 (庶務企業担当)	伊藤 康史	1980年度修士	新日鉄住金ソリューションズ (株)
本部幹事 (庶務企業担当)	松田 信之	1981年度修士	(株) 中電シーティーアイ
本部幹事 (庶務企業担当)	内藤 光俊	1990年度修士	新日鉄住金ソリューションズ (株)
本部幹事 (庶務企業担当)	村上 一彦	1990年度修士	(株) 中電シーティーアイ
本部幹事 (庶務企業担当)	中富 俊洋	1993年度修士	東邦ガス (株)
本部幹事 (庶務企業担当)	寺澤 知昭	1994年度修士	トヨタ自動車 (株)
本部幹事 (庶務書記担当)	加藤 芳秀	2002年度博士	名古屋大学
本部幹事 (広報)	間瀬 健二	1980年度修士	名古屋大学
本部幹事 (広報)	西田 直樹	2003年度博士	名古屋大学
本部幹事 (広報)	小田 昌宏	2003年度学士	名古屋大学
本部幹事 (広報)	北坂 孝幸	2002年度博士	愛知工業大学
本部幹事 (広報)	杉浦 洋	1980年度博士	南山大学
本部幹事 (広報)	宮崎 孝	1990年度修士	鳥羽商船高専
本部幹事 (広報)	太郎良 浩次	1990年度修士	(株) アーツネットウエーブ
本部幹事 (広報)	森田 智子	1991年度学士	中部電力 (株)
本部幹事 (広報)	藤富 知行	1993年度修士	(株) JERA
本部幹事 (広報)	森田 晋太郎	2004年度修士	(株) 日立製作所
本部幹事 (名簿)	出口 大輔	2005年度博士	名古屋大学
本部幹事 (名簿)	嶋田 創	1999年度修士	名古屋大学
本部幹事 (名簿)	大野 誠寛	2002年度学士	名古屋大学
本部幹事 (名簿)	梶 克彦	2003年度修士	愛知工業大学
本部幹事 (会計・工学部同窓会担当兼)	小川 泰弘	2000年度博士	名古屋大学
本部幹事 (会計)	濱口 毅	1994年度博士	名古屋大学
本部監事	曾山 豊	1993年度博士	中部電力 (株)
学年委員	廣瀬 光利	1976年度修士	(株) 廣瀬技術研究所
学年委員	清水 将	1980年度修士	島津システムソリューションズ (株)
学年委員	稲垣 宏	1984年度修士	豊田工業高専
学年委員	篠田 浩一	1993年度修士	(株) トヨタコミュニケーションシステム
学年委員	林 孝行	1998年度修士	東邦ガス (株)

名古屋大学名報会

〒464-8603 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学・工学部・情報工学教室内
 Tel.: 052-789-4387 幹事・松原
 E-mail: meihoh@nuie.nagoya-u.ac.jp

